



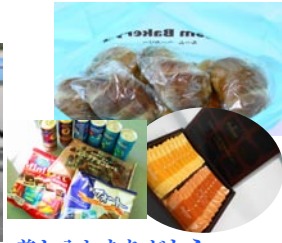
8月10日、11日実施の全道学力コンクールの結果をもとに面談を行いました



次の学力コンクール、3年生は11月です。



成績が志望校を決めるわけではなく、志望校に向かうことで成績が上がるのです！



差し入れありがとうございます。



25期生で北見看護大生の成瀬さんが久々に顔を出してくれました。大学の授業もほぼ対面授業で、実習も順調にしているそうです！



22期生で豊橋技術科学大学大学院の2年生の斗内君、2年ぶりです。就職も決まり、今は修士論文に取り組んでいるそうです。



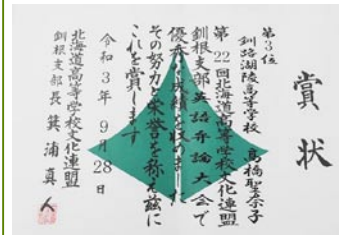
21期生の小原史也君、4月に釧路総合振興局から石狩振興局に異動になりました。石狩振興局は総合ではないので、暇ではないと言っていました(笑)



17期生で今年、歯科医の国家試験に合格、1年間大学院に残ってインターンを経験し、来春に八王子の歯科に就職だそうです。釧路に帰るのは3、4年後ですね。



**高橋さん英語弁論大会で三位に！**  
9月28日江南高校で、北海道高等学校文化連盟第22回全道高等学校英語弁論大会釧路支部の大会が行われました。  
この大会で、湖陵高校一年生の高橋聖奈さんが一年生の中では一位、全体では三位という素晴らしい結果でした。(二位までが全道大会だそうです) 全国大会出場を目指して頑張りたいと抱負を語ってくれました。おめでとう、高橋さん！



**高3受験生準備前倒し！**  
釧路市は27日、年内に大学や短期大学、専修・学校専門課程などの受験や就職試験を控えている市内の高校3年生を対象に新型コロナウイルスワクチンの接種スケジュールを前倒しすると発表した。予約はインターネットの専用ページ、またはコールセンターで29日から受け付け、早ければ30日から接種可能となる。  
市は「一年以内に受験を控えている高校3年生に、安心して試験を受けてもらおう」と、スケジュールの前倒しに踏み切った。このほかの高3生は、予定しているワクチン接種スケジュールで十分受験などに間に合うとしている。

**全国学力テストに思うこと**  
昨年は実施されなかった文部科学省による、全国学力テストの結果が発表されました。小学6年生と中学3年生の全国のほとんどの児童生徒が受験しました。以前に比べて一定の基礎知識の定着が見られた、という分析がありました。基礎知識とみられる

**項目の正答率が上がったということなので、**が、実に不思議なコメントです。全く同じ問題ではないのですから、どうして向上したと言えるのでしょうか。いくら問題作成に気を配っても同じ難度のものを作れません。過去の実施されたものとの比較をすること自体がナンセンスです。正答率とか平均点ではじいているのでしょうか、実におかしなことです。ずっとこんなことの繰り返しのような気がします。

実のところこのテストは、何の役に立つかと言えば文部科学省が一番強く否定する、地域の学力比較にしか役に立たないと思うのです。序列を作るための。学習状況の確認などであれば、無作為で抽出した10000件ものデータがあればおつりが来ます。いや、10000件もあればよいでしょうか。

私はこのテスト時に実施される、学習に関する意識調査の方が役に立つと思います。これだけならアンケート方式で全数の調査を実施しても意味があるとは思いますが。学校の指導だけでは大きく差がつくものとは思えません。実際には学校外学習の差が大きな影響を与えていると考えられます。

ただし都道府県別では上位の秋田や北陸各県などはこの学力テストでよい結果を出すために県ぐるみで対策しているという面はあります。

札幌進学「切磋琢磨」から

**在宅学習、帰省の持ち帰り問題**  
緊急事態宣言下、義務教育学校は授業の運営に苦労されているようです。今一番の問題が、在宅での学習でしょう。

文部科学省の発表では、は幸い小中学生はタブレットなどの学習用端末が配布されているとされています。しかし、なかなかネット配信による在宅での学習は、広がらないようです。家庭での通信環境の問題もあるでしょうが、面白い理由を発見しました。小学校のある校長先生のご意見のようですが、タブレットは学校の教室での授業では使用しているが、家庭に持ち帰らせると、破損させてしまう確率が高く、費用面でもなかなか実施できないものがある、という発言でした。

後頭部を殴られたような気がしました。家庭に持ち帰らせて、もし破損させたら、一体どうするのだというところのようです。残念ながらよくわからないのですが、国は配布に当たって、ある程度の割合で破損することを想定していいのでしょうか？ 想定内なら、国や学校の費用負担となりますが、では、何を心配しているのでしょうか。学校関係者がこのことを心配するあまりに、家庭への持ち帰りに躊躇しているとしたら、最初からタブレットなど使用することを、考えない方が良いでしょう。普及に関しては議論のレベルが低すぎます。コロナは待ってくれません。

札幌進学「切磋琢磨」から

10月になりました。高校入試までは153日、共通テストまでは105日です。中3生は学力テストB、Cと受験勉強が本格化します。

コロナ緊急事態措置は解除になりましたが、すぐにコロナ禍以前の状態に戻るわけではありません。外国の例にもあるように一度取まらけて再び感染が広まっているところもあります。冬に向かうので安心は出来ません。部活動も始まります。冬に向かうので安心して通ってマスク、手洗い、消毒をお願いします。

コロナ禍以降の社会は格差が広がります。コロナ禍の影響による倒産、廃業、それに伴う失業、他人事ではありません。格差社会の波に飲み込まれないように、今できることにしっかりと取り組みましょう。

31	30	29	28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
日	土	金	木	水	火	月	日	土	金	木	水	火	月	日	土	金	木	水	火	月	日	土	金	木	水	火	月	日	土	金
休							休		◆					休			◆				休				◆			休		
休							休		◆					休			◆				休				◆			休		

◆ 学力Bテスト ◆

◆ 鳥取定期 ◆

◆ 附属3年定期 ◆

公立高校入試まであと153日  
共通テストまであと105日

携帯・スマホ持ち込み禁止！  
ストップ 過保護・過干渉！

マスク、手洗い、消毒を！  
10月の予定

ヤングケアラー 今がんばっている君へ

## 小学4年から「小さな保護者」

### 22歳女性の経験から見たケアの実態



グループホームで利用者に夕食を作るバレンシア・ジョセリンさん＝川崎市中原区で2021年6月15日

政府が4月に公表したヤングケアラーに関する初の実態調査で、小学生は調査対象から外れた。しかし、一部の研究者の調査で小学生ケアラーの存在は把握されている。小学生時代から家族の世話や介護に追われた子たちは、どんな思いで生きてきたのだろうか——。記者（私）は、子どもを支援する団体などあちこちに取材していた先で、一人の女性に出会った。病気の母に代わり、幼いきょうだいの世話や家事を担い始めたのは小学4年生の時だという。彼女は今、大学4年生。取材を通じて見えたのは、家族への責任感を背負い込んだ「小さな保護者」の姿だった。 【三上健太郎/デジタル報道センター】

「今日は何をしていたの?」「お母さんと仲直りした?」

軽度の知的障害者の女性3人が暮らす、川崎市中原区のグループホーム。6月半ばの午後6時過ぎ、一軒家を改装したこのホームでバレンシア・ジョセリンさん(22)＝フィリピン国籍＝が同年代の利用者に話しかけていた。

バレンシアさんは週2回、ここで調理や掃除のアルバイトをしている。この日の夕食の献立は肉じゃが、ピーマンとハムのサラダ、みそ汁、白ご飯にフルーツ。手際よく調理したナスの煮浸しと、これから焼くサケは翌日の朝食用だ。「いつものように、おいしい」。利用者の一人は箸を動かしながら、「(バレンシアさんは)話を聞いてくれるのがうまいよ。楽しい時間」とにっこり。もう一人の女性も「年が近いから話しやすい」と笑顔をみせた。

#### 通訳や家事、弟の世話

フィリピン出身の母は1987年ごろに初めて来日し、日本とフィリピンを行き来した。バレンシアさんもフィリピンで生まれ、生後半年で来日。以来、川崎市で暮らしている。フィリピン出身の実父の記憶はない。幼いころは、母と日本人男性との間に生まれた兄らも一緒に暮らしていたため、家庭での会話は日本語だった。

小学4年の時に、母が子宮がんを診断された。このころ、同居していたのは母、17歳年上の姉、2歳年下の弟、弟と同学年の姉の息子。タガログ語が主言語の母と姉は、日本語は話せても読み書きが不得手で、学校の書類を読んで説明したり、提出書類を書いたりするのはバレンシアさんの役目だった。弟が学校を休めば、連絡帳には「お休みさせていただきませう」と友達の親のまねをして書いた。



バレンシア・ジョセリンさんが作った肉じゃが＝川崎市中原区で2021年6月15日

ほどなく母は入院し、姉と2人で家事を担うことになった。朝は6時台に起き、パンや目玉焼きを作って朝食を準備。弟たちを起こして食べさせ、洗濯物を干して学校へ。下校すると宿題を済ませ、スーパーに買い出しに行き夕食を作る。仕事から

帰った姉が夕食を担当してくれることも多かったが、これらを一人でこなさなければならない日もあった。

「昔から食器を洗ったり、ご飯を炊いたり母の手伝いをしていたので、その延長線。周りの子とはちょっと違うことをしているだけで、さみしいとかつらいとかはあまり思わなかったです」。家族の世話や家事を始めたころは、さほど違和感はなかったと振り返る。だが、世話が日常化する中で次第に疲労はたまっていた。周りの人から「いつも偉いね」と褒められてうれしい半面、「私しかない」という重圧感も増していった。

#### 「我慢すれば何とかなる。大丈夫」

入院中の母は「ごめんね」と言ってくれた。疲れた気持ちや甘えたい思いはあったが、心配をかけまいと本音は小さな胸にしまい込んだ。学校の先生も母の入院を把握し、「お母さんの調子どう?」と気にかけてくれたが、家で何をしているかなど具体的なことを聞かれた記憶はない。弟が出し忘れた書類があれば、先生は直接、催促してきた。「私がやらないとどうにもならない。自分が頑張ればいい。

我慢すれば何とかなる」。そう自分に言い聞かせるしかなかったから、「おうち大丈夫?」と聞かれれば、「大丈夫」と答えた。

母は1年間の闘病の末、2010年に45歳で亡くなった。バレンシアさんはまだ5年生。悲しい気持ちは一番にあったが、「これからどうなってしまうんだろう」という不安も強かった。

母の死後も、姉との家事分担は続いた。落ち着きがなく、なかなか言うことを聞いてくれない弟の面倒を見るのも変わらなかった。弟の担任に会うたびに「授業ちゃんと聞かない」と聞かされるのが嫌だった時期もある。弟への不満や家事の疲れを感じるたび、母の写真を保存した携帯電話を取り出した。母が元気なころ、自宅で何気なく撮ったツーショット。「お母さんがいればなあ」。何度もそう思った。



グループホームで利用者の話を聞くNPO法人「ホッとスペース中原」代表の佐々木炎さん＝川崎市中原区で2021年6月15日

きょうだいのケアを担う子どもがいる家庭への家事支援サービスを検討したり、子どもを救済するために教育や医療など多機関が連携したりすることなどが盛り込まれたが、当時、バレンシアさんが頼る先は限られていた。

#### 同級生の父母との出会いが支えに

支えたのは、川崎市中原区のNPO法人「ホッとスペース中原」の代表で牧師の佐々木炎(ほのお)さん(56)と妻の直子さん(56)だ。バレンシアさんが小学1年生の時に同級生だった佐々木さんの長女からクリスマス会に招かれ、教会の日曜礼拝に通い始めたのが交流のきっかけだった。

母の葬儀は佐々木さんの教会で営まれた。母が眠るひつぎを前に、バレンシアさんは佐々木さん夫妻に「ハグしてほしい」と頼んだ。気丈に振る舞っていたが、直子さんの胸に顔をうずめ、泣きじゃくった。その時、佐々木さんは「気を張って生きてきたんだな。小さな背中にどれだけのものを背負ってきたんだろう」と感じたという。

母と佐々木さん夫妻は同い年。「本当のママにはかなわないけど、いつも応援しているし、ママだと思って接しているよ」と折に触れて声をかけ、学習や金銭面での支援をしてくれた直子さんや佐々木さんの励ましが力になった。中学生になると、自分や弟、姉の息子の弁当作りや夕食の準備に追われることもあったが、陸上部で汗を流したり、姉が仕事から早く帰る日は遅くまで友達と遊んだり、自分なりに時間を工面できるようになった。

#### 自分の経験を強みに変えたい

公立高校に進み、奨学金も得て大学に進学したバレンシアさんに転機が訪れたのは、大学2年だった19年8月。米テネシー州に4カ月間の語学留学をした経験だ。家族と長期間離れるのも、自分のためだけに時間を使うのも初めて。「罪悪感もあったが、自分の成長につながる時間を過ごせたことは幸せだった」と言う。



昨年1月には佐々木さんらの支援もあり、1人暮らしを始めた。高齢者が通うデイサービスや知的障害者らが暮らすグループホームでアルバイトをする中で、「ヤングケアラーだった経験があるからこそ、弱い立場の人たちの気持ちに共感したり、寄り添ったりできるのではないかと考えるようになった。もし誰かが家事を肩代わりしてくれていたら、もっと友達と遊んだり、やりたいことが見つかっていたりしたかも——。そんな思いが頭をよぎることもある

が、自分の経験を強みに変えようともがく。

あのころの自分のように、悩みを抱えて無理に強がるような子どもを一人でも多く減らすにはどうしたらいいのか。必要な支援とは。大学4年生。「ヤングケアラー」を卒業論文のテーマに選んだ。

<今がんばっている君へ バレンシアさんのメッセージ>

きょうだいにはなるべくさみしい思いをさせないようにする一方で、自分は親に甘えられずに我慢したこともある。一人で抱え込みすぎず、信頼できる人に話したり、自分の好きなことができる時間を大切にしたりして、気持ちをリフレッシュしてほしい。

毎日新聞 2021/8/9

**家族の世話や介護などに追われる「ヤングケアラー」と呼ばれる子どもたち。その割合が、中学生のおよそ17人に1人、全日制の高校生の24人に1人に上ることが国の初めての实態調査で分かりました。皆さんはそんな状況にはないと思いますが、もしそんな状況になったら必ず誰かに相談してください!**